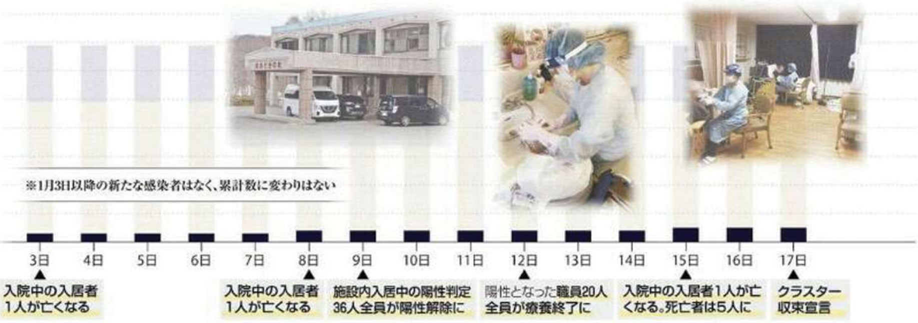


クラスター発生 33日間の苦闘

特養ホーム「おおたきの杜」収束までの記録

入居者の身体状況などがひと目で分かるようにした大型のホワイトボード。職員が情報を共有する生命線になった＝いずれも提供写真。一部は加工しています

㊨保健所から託された納体袋。封を切らないまま返却することになった㊧玄関先に届いた地元からの支援物資

新型コロナウイルスのクラスター（感染者集団）発生は、当たり前のようになって日々報じられているが、重症化リスクの高い高齢者が暮らす施設はこの1年余り、「いつ、どこで発生してもおかしくない」状態で、薄氷を踏むような運営を続けている。今年1月17日、33日間のクラスターを脱した伊達市の特別養護老人ホーム「おおたきの杜」では何が起き、どんな対応があったのか。運営する社会福祉法人「幸清会」（本部・胆振管内洞爺湖町）の内部記録や当事者からの聞き取りを通じ、緊迫の日々から得られた教訓を考えた。（石原宏治）

幸清会　胆振管内を中心に介護事業を展開する社会福祉法人。特別養護老人ホームなどの施設系、デイサービスなどの居宅系を合わせて40の事業所に、700人が働いている。

大型のホワイトボードに手書きで入居者の氏名、体温、食事、水分などの情報が書き込まれていた。そして、「頑張りましょう!!」の言葉も。

ボードで情報共有

おおたきの杜施設長の井谷富彦さん(46)は「大変な毎日で、通常の記録を残せなくなってしまい、ホワイトボードを書き換えながら変化が分かるよう、2時間おきにボードの写真を撮っていました」と振り返る。

2階建てで定員50人、職員は28人。クラスターで感染者は入居者47人、職員は17人、さらに応援に入った他施設の職員14人のうち3人を合わせて67人に達した。そのうち入居者5人が入院先で亡くなっている。介護に当たる職員はほぼ全員が感染者となったので、応援態勢なしには乗りきれない事態だった。

当初は食堂や浴室のある1階をグリーンゾーン（清潔区域）、4人部屋中心の居室がある2階をレッドゾーン（汚染区域）としていた。職員はいったん2階で介護に入ると休憩場所もなく、飲食もできないまま働くことになってしまった。食事も個々のマイカーでとるなどしていた。

クラスター認定された翌日、昨年12月17日、札幌医大教授で感染制御が専門の高橋聡さん（日本感染症学会理事）が現場入り。「このままではスタッフが疲れてだめになってしまう。スタッフを守ろう」と、2階にもグリーンゾーンを設けて職員が休憩や飲食ができるようにするなど、さまざまな対応法を決めてくれた。

なぜ「納体袋」が…

一方で感染者は急速に増え、19日には59人に達した。その日の現地対策本部での打ち合わせを経て、陽性入居者の容体が悪化しても入院先が確保できないので、施設内での看取り体制を整備するよう通達を受けた。

病院移送は無理…通達に衝撃 ／ 激励に救われた

病院は受け入れ不可、悪化したら施設で死なせるしかないというに等しい宣告。室蘭保健所からは、遺体を入れるための納体袋が届いた。職員は見たことも使ったこともない納体袋に、衝撃を受けた。

新たな看取り方針は、入居者の家族にも連絡する必要があった。

「本当にお世話になりっ放し。今まで新型コロナが施設で出なかったことの方が不思議なくらいなんだから。恥ずかしいことじゃないしさ。職員のみなさんもやさしく接してくれているからうつるさ。元気出して頑張って」—

ねぎらいや職員の体調を気遣う声が相次ぎ、この日から年明けの10日まで泊まり込むことになる施設長は「救われた思いでした」と話した。

偏見持たれず安堵

地元からの支援も相次いだ。カップ麺や飲み物、缶詰などが大量に届いた。こうしたことが「世間からどう思われているだろう」と気にしていた職員にとって、「偏見を持たれていないことが分かった」という安堵につながった。

職員の精神的な負担感を軽くするため夜勤体制を拡充したり、看取り後に死亡診断する医師を手配したりもしたが、「施設内看取りはあんまりな方針だ」として改善を求めた結果、23日には入院も可能になった。入居者が24日、応援職員が1月2日を最後に新たな感染者は出なくなり、クラスターは収束に向かう。

クラスターの収束から3カ月、施設長は「これからどうなってしまうのだろうという不安の中にいた私たちは、入居者のご家族や地域のみなさんに支えられて持ちこたえました」と感謝。最近は入居の問い合わせが増え、「クラスターの報道を見て、頑張っている事業所だから、ここならお願いできると思った」と申し込む人もいるという。

くらし

きょうの一品

アスパラと桜エビご飯

◇材料（２人分） アスパラ３本、洗米した米１合、桜エビ大さじ２、バター15㌘、昆布２㌢角１枚

◇作り方

❶米、桜エビ、バター半量、昆布を一緒に炊く。

❷アスパラは根元の硬い部分とはかまを取り、穂先を残して長さ１㌢に切る。

❸❷と残りのバターをフライパンに入れて強火にかけ、水分が無くなるまで炒める。

❹❶が炊き上がったらすぐに❸を混ぜ、５分蒸す。

＝１人分338㌔㌍、塩分0.3㌘ （松田真枝）

2021. 4. 21

◇レシピと写真は「どうしん電子版」に掲載しています。

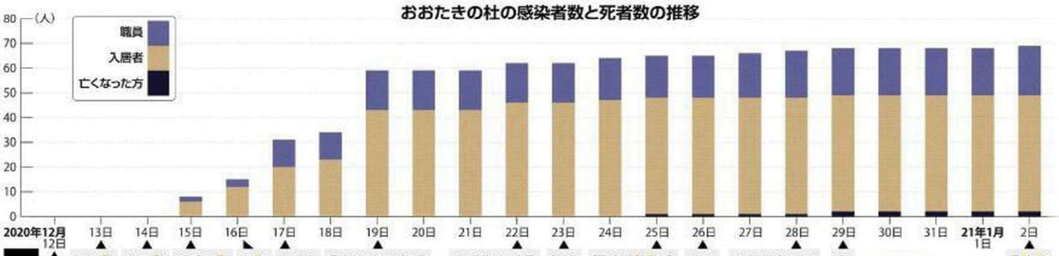
強い意識 行政の方針先取り
明文化し徹底 行動メモも

「ある社会福祉法人の対応」として昨年４月21、22日の「くらし面」で連載した幸清会の新型コロナウイルス対応。インフルエンザやノロウイルスに備えたものをさらに厳格にした。掲載記事は、どうしん電子版＝QRコード＝でも読むことができます。

21日 22日

◇おことわり 「『生きる』しくみ」は休みました。

おおたきの杜の感染者数と死者数の推移



おおたきの杜のクラスターの経過

2020年12月12日	**入居者3人が37度台の発熱**
13日	**発熱者が8人に増加。**関係機関への連絡、居室隔離、法人内の他事業所からの応援態勢準備
14日	**発熱者11人に。**法人本部に対策本部を設置。保健所が入居者全員と職員全員のPCR検査
15日	**入居者6人、職員2人の感染判明。**家族に連絡するとともにホームページで公表。以後、毎日、状況を更新して公表
16日	**クラスターと認定。**現地対策本部を近隣の集会所に設置
17日	札幌医大の高橋教授が現地入りし感染対策の指導。応援職員が入り始める
19日	現地対策本部の打ち合わせで、医療体制が逼迫（ひっぱく）し、入居者の容体が悪化しても受け入れ病院がないため、施設内での看取り体制を整備するよう求められた。保健所から**遺体を入れる納体袋が届く。**そうした状況を家族に連絡
22日	看取り体制について隣町の在宅クリニックが死亡診断をしてくれることに。感染した職員と接触のあった職員や家族がいたことから、保健所が別施設３カ所で全職員のPCR検査実施を通知
23日	現地対策本部で胆振総合振興局と協議、施設内看取り方針が転換
25日	３施設は全員陰性確認。**入院中だった入居者1人が亡くなる。この日以降、新たな入居者への感染はなし。**道医療参事の医師が施設を訪問、感染防止対策が徹底しているとの評価を得た
26日	応援職員用に確保している住宅の除雪班を法人内で編成した
28日	法人内事業所に対し、年末年始の感染防止のため、会食や会合の回避、感染拡大地域との不要不急の外出制限、体調チェックの徹底、事業所における感染予防対策の徹底を通知
29日	**入院中だった入居者1人が亡くなる**
2日	**応援職員1人が陽性で入居者47人、職員20人の合計67人に。**これが最後の陽性者に

運営法人 大久保理事長に聞く

面会を制限、行動管理しても防ぎきれず

幸清会は新型コロナウイルスの感染拡大が問題となった昨年2月から職員の行動記録や出勤時の着替えなど綿密な対応マニュアルを作成、実行してきた。「ある社会福祉法人の対応」として昨年4月21、22日の「くらし面」で連載、参考にできる先駆的な取り組みを紹介している。それでもクラスターは発生した。理事長の大久保幸積さん(66)に、クラスター1を振り返ってもらうとともに、今後の取り組みについて聞いた。

◇

――相当な対策を実施しながらもクラスターが発生しました。

「発熱者が相次いでいると報告を受けた段階で『やはり防ぎきれるものではなかったか』と受け止めました。そして拡大は急速でした。４人部屋中心の多床室での生活、食堂に集まる食事時間は、距離をとってはいても入居者はマスクをしないなど、どうしても限界がありました」

――急激に感染者が増え、施設内看取りを要請されたころが最も厳しい局面だったように感じました。

「職員がクラスター発生に対する自責の念を持ちながらも、必死で介護に当たっているとき、納体袋が届きました。入居者は容体が悪化しても医師の治療を受けさせてもらえず、職員は無力感にさいなまれながら、看取るしかないというのはあんまりです。もう少しやりようがあるのではないかと憤りを感じました。職員の張り詰めた気持ちがガクッときてしまうのではないか、と心配しましたが、踏ん張ってくれました」

――準備していた対応マニュアルが役に立った場面はありましたか。

「法人内で他の施設からの応援を迅速にできました。それは介護現場に入る応援だけではなく、応援者の住宅手配やそこの除雪なども含めた対応です。その結果、陽性反応が出た職員も安心して隔離生活を送ることができたと思います。法人全体で取り組んだため、なんとかなりましたが、一つの施設だけでは難しいこともよく分かりました」

――感染ルートは分かりましたか。

「感染ルートの絞り込みは難しく、今もって断定できません。入居者と外部の接触は面会制限をしていたこともあって、訪問診療や病院の受診くらいでした。一方で職員が持ち込んだ可能性があるという報道をされたこともありましたが、体調管理表や外出先報告、クラスターの経過などから考えると、その可能性はとても低いとみています」

――収束後、新たな取り組みなどはありますか。

「施設の平面図を用いて、感染者が出た場合、レッド、グリーンのゾーン分けを速やかに行うシミュレーションを法人全体で徹底しました。正しい手洗いやマスクの着用も再確認。感染者の介護に伴う感染を防止するためのガウン着脱の実技訓練も強化しました」

――振り返って心に残ることは。

「クラスターを発生させてしまったことを、あらためておわび申し上げます。ただ、職員が誰一人、現場を逃げ出さず、専門職としての責任感を持って向き合ったことには誇りを感じました。また、地域の皆さまからのバッシングや苦情が全くなく、逆に多くの励ましがあって救われました」

おおくぼ・ゆきつむ 和歌山大大学院博士課程修了。工学博士。1976年に社会福祉法人「幸清会」に入り、2006年から理事長。北海道認知症ケア研究会や北海道ユニットケア研究会の会長など公職多数。

「親と子サンデー」は毎週日曜日、「子育て」は毎週金曜日の道新先生のページに掲載しています